

宮城学院の森を美しく一遊歩道の有効活用

宮城学院学院長 嶋田 順 好

宮城学院の魅力の一つとして美しいキャンパスということが挙げられるでしょう。一粒社ヴォーリズ建築事務所の設計は、緑濃き森と起伏に富んだ丘陵地を大胆且つ巧みに取り込み、キャンパスを訪れる者の心をとらえて離さない独創的な意匠に満ちたキャンパスを生み出しました。日本全国とは言わないまでも東北地方で、これほど典雅にして優美なキャンパスを有する学校法人はないのではないかと思います。1982年度の建築業界賞に輝いたのも、むべなるかなとの思いを強くさせられます。

しかもこのキャンパスの魅力は、日常的に目に触れるキャンパス・コモンだけにとどまりません。広大なキャンパスの外周を野趣に富んだ遊歩道が囲み、ちょっとしたハイキング気分を満喫することもできます。本館裏から遊歩道に分け入り、音楽館の裏を通り、丸田沢に抜け、そこからこども園に至る道は、まさに自然観察の宝庫です。こども園の園児たちが、この遊歩道を通して、サワガニやヤゴを見つけて大喜びしています。

今、日本の各地で放置されたまま荒れ果てた里山を復活させようというNPO活動が活発に動き始めています。先日、そのような活動を鳴子で展開している方と面談する機会を与えられました。もともとは手広く輸入材を販売する製材業を営んでおられたそうですが、輸入材が毒性の強い薬剤を用いて腐食や虫害に強い材木に加工されることで、深刻なシックハウス症候群をもたらす現実に衝撃を受け、ご自身の事業を大きく方向転換されたということでした。まずは荒れ放題の里山を保全し、薬剤を用いなくても長期間の使用に耐えうる日本の気候風土にあった自前の建材を生み出す活動を始められたということでした。なるほどと納得させられたことは、樹木の成長がとまる冬の期間に切り出された木材は、虫害や腐食に強く、しっかりと乾燥させれば薬剤を全く用いなくても十分建材として使用に耐えるということでした。

その方と一緒に遊歩道を歩いて、宮城学院の森を診断していただいたところ、桜ヶ丘地区にキャンパスが移転された1980年以降、全く人の手が加えられておらず、荒れ放題の状態になっているということが分かりました。下草刈りや適切な間伐を施し、枝打ちなどをすれば、風通しのよい素晴らしい森が復活でき、松くい虫の被害も防げるようになるとのことでした。しかも様々な工夫をこらしながら自然観察のためのポイントを取り込み、園児、生徒、学生の学習に存分に用いることがいくらでもできるということです。たとえば、丸田沢に数多くの野鳥や渡り鳥が飛来しますから、その水辺に観察小屋を設置したり、樹齢300年は経過しているであろう樅ノ木の巨木にツリーハウスを設けたりしたら、園児たちは大喜びすることでしょう。夢はどんどん膨らみます。

創世記1章31節には「神はお造りになったすべてのものをご覧になった。見よ、それは極めて良かった」と告げられています。創造主である神から被造世界の統治を委託されている私たちには、被造世界を美しく保全する責任があります。まずは足元の宮城学院の自然環境を整え、教育のためによく用いる工夫をすることが大切な課題ではないでしょうか。遊歩道を整備したり、森の間伐や下草刈りをしたりすることも広い意味での教育的な課題として位置づけ、学生・生徒のボランティア活動を組織しながら、自前で宮城学院の自然を美しく育み、整え、学習のためにも利することができたらどんなによいことでしょう。一朝一夕にはいかないかもしれませんが、息長く地道な取り組みを心掛けていきたいと願っています。